


 書評

石坂好樹 著

自閉症考現笥記

山崎晃資

本書の表題「自閉症考現笥記」に惹かれて読み始めた。著者は「あとがき」で、「トレント・Jr の『精神薄弱の誕生とその変貌—アメリカにおける精神薄弱の歴史—』(学苑社)を読んでいるうちに、自閉症も社会的概念であり、そのような視点から自閉症史を考えてみよう」と思い立ち、「自らの興味の赴くところを文献に当たりながら考えるというやり方で原稿を書き、この書名にした」と述べている。まさに著者ならではの興味ある「自閉症史」であり、京都大学の高木隆郎一門の伝統が息づいている感のある著書である。

本書は、まず「野生児の仮面」から始まる。著者は「アベロンの野生児」ヴィクトールを、「歴史上、明確に状態像が把握され、公表された最初の自閉症児であろう」とし、一方では、「診断基準を満たす症状が揃っておれば、自閉症と診断されてよいのである」という現在の診断様式」に疑問の目を向けている。

イタールがヴィクトールとのかかわりの中で重視したのは、「厚くもてなし、他者の存在様式を尊重し、そして互いのことをよく知り合うことが出発点である。ことばのレベルではなく情感のレベルで、他者と互いに知り合う」ことであるという。ここで著者は重大な問題提起を行っている。すなわち、「イタールがヴィクトールを文明化しようとすると同じように、自閉症の子どもを社会化しようとする限り、イタールが体験した壁をわれわれは超えられない」という。「強制的な社会化は破綻するしかなく、異界から他者との相互理解に基づいた関係、一方的な存在様式の押しつけでない関係がどのよ

うにして可能であるかが、われわれに残された課題であるかもしれない」という。

第二章に当たる「精神病への囲い込み」では、「精神病」という用語の歴史的概観をしながら、最早発性痴呆、こどものスキゾフレンシア、そして自閉症概念の登場へと論述が進められていく。カナーの症例報告が登場する以前の諸研究、さらにその後の自閉症研究についてのまさに批判的展望と鋭い切り込みは、若手の児童精神科医にぜひ読んでおいてもらいたいところである。

1957 年に比叡山延暦寺の宿坊で行われた「精神病理懇話会」で呈示された症例について、カナー教授のところから帰国したばかりの牧田清志が「これがカナーの自閉症だ」と断言するくだりでは、いろいろなことを思い出す。

著者は、自閉症と言われる人の持つ関係様式を「事実に関係優位の関係様式」と呼び、「自閉症」および「発達障害」という用語そのものに疑問を投げかけ、「自閉症が発達障害でないことを考察しなければならず、それこそが、この病名にまつわる歴史を転換させる梃子となりうる」と結んでいる。

本書では、アスペルガー症候群についてほとんど触れられていないが、執筆中という下巻で鋭い論陣が張られるのであろう。期待してやまない。

(目白大学)

●四六判 208 頁 2008 定価 2,940 円(本体 2,800 円+税) 星和書店